

蚊帳(かや)の中は夢心地

近年の夏の暑さは異常です。今年も例年以上の猛暑です。秋葉区は、全国一の最高気温を記録したこともある地域で、ことさら暑さに辟易する毎日です。学校でも、生徒の健康管理に最善の注意を払って部活動や新風祭への準備を進めていますが、この暑い中でも、子どもたちが元気に活動する姿を、とても頼もしく感じています。

私が小中学生の頃は、夏とは言え、30℃を超える日が何日も続くことや35℃を超える日などはありませんでした。今よりはしのぎやすい夏だったとは思いますが、それでも学校や各家庭にエアコンはほとんど設置されてはおらず、今の暑さを嘆くたびに、エアコンもなかった昔の夏はどうして過ごしていたものかなと思い出されます。

その中で、今の若い皆さんは知らないかもしれませんが、夏の夜は、どこの家も蚊帳(かや)をつったものです。今の子どもたち、いやお父さんお母さん世代も、蚊帳の現物自体を知らない人がいるのではと思います。寝床を蚊から防ぐために、先人の知恵が生み出した日本の誇るべき必需品であったと懐かしく感じています。

家族が一つの蚊帳の中に川の字になって寝ました。蚊帳の中で母親が昔話や近所の噂話をおもしろおかしく語ってくれました。畏怖の存在たる父親がいびきをかいて熟睡している姿に、安心感にも似た感覚を覚えたものです。

蚊帳が減ったのは、昭和40年代の高度成長時代に入ってからだと言われています。ドブ川が減り、殺虫剤の普及で蚊の発生が激減しました。木造の家屋も減り、蚊帳を吊す鴨居も徐々に姿を消しました。サッシが普及して開けっ放しで家中に風を通すのは、防犯上難しくなったのも影響していると言われています。

朝のまどろみの中で、蚊帳を畳むとき、きまって蚊帳を大海に見立てて泳ぐまねをして母親を怒らせたものです。中に入った一匹の蚊を追い掛け回した夜。蚊帳には、単に蚊から身を守る以上の何か

がありました。雷が怖くて蚊帳にもぐって震えた日。夢うつつに遠くに聞いた花火の音。蚊帳が肌に触れたときのあの涼しげな感触。

私は、自分だけの秘密基地と化した蚊帳の中で、小学校の時は夏休みのドリルや日記の宿題、中学校の時は、進路教材（「新研究」「整理と対策」「マイペース」のようなテキストは昔からありました）に取り組んだ記憶が今なお鮮明に残っています。

さて、話は変わりますが、夏休み前に、生徒・保護者・教職員に、前期学校評価としてアンケートを実施しました。それぞれに、いろいろな質問項目を設定しましたが、私が最重要視し、真っ先にその結果をチェックするのは、生徒アンケートの『学校生活は楽しいですか？』という項目です。

今回のこの質問に対する全校の肯定的評価割合は、87.4%でした。皆さんはこの数字をどのように受け止めるでしょうか？

普通のペーパーテストなら、87点もとれば及第点でしょう。他校と比較しても決して見劣りする数値結果ではありません。しかし、私は全く不十分だと考えています。なぜならば、裏を返せば、13%の子どもたちは学校が楽しくないと思っているのですから。

学校の最終目標は、すべての子に「学校は楽しい」と思ってもらうことです。つまり、87%であろうが、93%であろうが、98%であろうが納得できるものではないということです。

もうすぐ、夏休みが明けます。その後、新風祭・新人大会・合唱祭をはじめとして、大きな学校行事や大切な教育活動が目白押しです。

これまで以上に、クラス一丸、学年一丸、チーム一丸、学校一丸となって取り組むことが重要となる大切な山場を迎えるのです。

そのような大事に時期を迎え、集団の中から一人でも“蚊帳の外”の人間が出ることのないような、自ら“蚊帳の外”に身を置こうとする生徒や教職員が出ることのないような、そんな人づくりと学校づくり、言い換えれば、支持的風土に満ち満ちた、だれもが「学校は楽しい」と思えるような学校づくりに向けて、生徒・保護者・先生方・地域の皆さんすべてのさらなる努力を引き続きお願いするものです。

夏休みも、あと五日となりました。

私から皆さんに夏の一句を謹呈します。

「いつまでも あると思うな 夏休み」